

令和4年度水産研究所研究成果発表会について

水産研究所では「豊かな海・川の実現と魅力ある水産物の消費拡大」を目標に、水産資源の回復や養殖業の安定を図るための調査研究に取り組み、得られた成果は発表会等を通じて水産関係業界や県民の皆様にご紹介しています。近年はコロナウイルスの感染拡大によりホームページを通じての紹介に留まりましたが、令和5年3月14日に3年ぶりに岡山市において、漁業関係者、教育機関や企業、一般の方など52名の参加をいただき、口頭およびポスターによる発表を行いました。

発表会では口頭発表3課題を行い、「児島湾周辺海域における海底耕うんの実証試験」について、児島湾周辺海域で海底耕うんを行い、海水中の栄養塩濃度が上昇したことや湾内外の泥質調査を基に耕うんによる栄養塩供給効果を評価した結果の報告を行いました。

「環境DNA及びDNA標識を用いたモクズガニ種苗の放流後の追跡調査」では、本種苗を放流した河川の水環境中に含まれる本種由来のDNAを検出して放流後の移動分散状況等を調査した結果や漁獲個体のDNA標識を分析して放流種苗か天然個体かを判定し、放流効果を推定した結果について報告を行いました。

「アユ資源の回復に向けた要因の検討と産卵場造成の取組」では、春から秋のアユの生残に秋季の河川流量が影響していることや初期生残を高める対策として産卵場造成試験に取り組んだ結果等の報告を行いました。

ポスター発表は、「周期性を利用した海水水温の予測システムの開発」、「DNA標識を用いたガザミ種苗の放流後の追跡調査」、「雌サルエビの体長と産卵数およびふ化幼生生態

の関係」、「岡山県産天然由来アユの量産に向けた技術開発」の4課題についてポスターの展示を行い、各担当者から適宜参加者に説明を行いました。

会場では参加者から発表者に対して、「海底耕うんが養殖ノリに与える効果はどうか。」、「モクズガニは支流に多いが、何を食べて育つのか。」等の質問をいただきとともに、アンケート調査では6割の方から分かりやすいとの回答をいただき、「アユの産卵場造成についてさらなる効果的な取組を期待する。」などの意見や地球温暖化が魚類に与える影響や養殖ノリの色落ち対策など近年の地球環境や瀬戸内海の漁場環境の変化をテーマとした研究等の要望をいただきました。

当研究所では成果発表会に参加いただいた皆様の意見や要望を踏まえ、今後とも本県水産産業のさらなる発展に資するよう調査研究に努めてまいります。（栽培・資源研究室：中力）



写真1 所長あいさつ

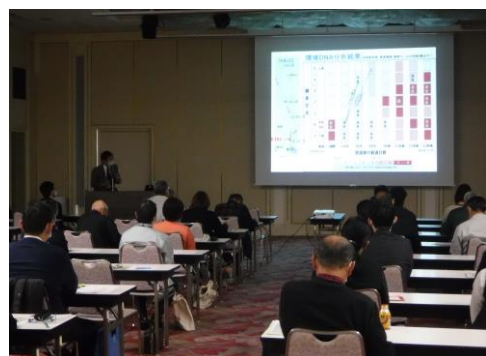


写真2 口頭発表状況